

氏名(国籍)	李 ^り 征 ^{せい} (中国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第1,769号
学位授与年月日	平成10年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	日本と中国の新感覚派文学運動に関する比較文学的研究 1920-1940
主査	筑波大学教授 理学(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 名波弘彰
副査	筑波大学教授 阿部軍治
副査	筑波大学教授 池内輝雄
副査	筑波大学講師 理学(学術) 今橋映子

論文の内容の要旨

本論文は、日本と中国の新感覚派文学運動に関する比較文学的研究である。研究対象の期間を「1920-1940」に限定しているように、本論文は文学史的にみて、1920年代の日本の新感覚派文学運動の発生時から、1940年代の中国の新感覚派文学の終焉までの期間における両国の文学現象を扱い、その時期の文学現象を多岐にわたる視点から考察したものである。本論文の構成は大きく2部にわかれ、全部で11章からなる大部の労作である。第1部「新感覚派文学の風土と同時代の日中文学—横光利一の『上海』を中心にして—」は3章からなり、横光利一の長篇小説『上海』を対象に、その題材、都市表象の問題、人物造型論を三章に分けて考察している。すなわち、第1章「『上海』論(一) 五・三〇運動の同時代史料と小説の虚構の間」では、作品の題材に関して、中国側の歴史・社会・文学・地理など多方面の同時代史料を博搜・駆使して比較研究を行い、作品の題材を中国人の視点から捉え返すことで新たな解釈を見出している。第2章「『上海』論(二) 虚構としての小説空間と租界都市上海」では都市論的観点から、まず上海という都市の歴史的・政治的位置をおさえ、この上海という都市の文化的コードを駆使して作品を分析している。従来の論考にみられる構造主義的な都市解釈による作品分析を批判し、ポスト構造主義的な作品分析となっている。第3章「『上海』論(三) 身体性の表現と小説の政治学—横光利一『上海』における外国人表象—」における考察は、ポストコロニアリズム的観点から、『上海』に描かれた外国人表象の分析を行っている。その結果、この作品には、その特色として、日本人的な歪曲あるいは限界がみとめられるとし、そのためにこの作品が外国(東アジア地域)に開かれたものとならなかった、と結論づけている。

第2部「日本と中国の新感覚派小説におけるモダン都市の描出—都市小説の新たな展開、主題とモチーフ・手法—」は8章からなり、前半の6章は、3章ごとに一つの総合的な比較文学的研究となっている。すなわち、第二部の第4章「画家とモデルの世界、または外部の誘惑—十一谷義三郎『静物』論—」、第5章「都市の成立と新しい「儀式」—劉呐鷗「礼儀と衛生」における<礼儀>の意味を中心にして—」、第6章「都市小説における画家とモデルの登場—1920年代の東アジア地域の文化環境をめぐって—」の3章は、「I 新感覚派小説に見る画家とモデルの世界—十一谷義三郎と劉呐鷗—」とまとめられ、また第7章「近代における都市と精神病—池谷信三郎の「橋」とその周辺—」、第8章「<健康>という問題意識の背後—施蛰存の小説「夜叉」に見る狂気—」、

第9章「池谷信三郎の『橋』と施蛰存『夜叉』の比較文学的考察—日中近代文学における都市と狂気をめぐって—」の3章は、「Ⅱ 新感覚派小説に見る都市と狂気—池谷信三郎と施蛰存—」とまとめられている。この3章ずつの構成は、まず、最初の章で日本の新感覚派作品を考察し、次章ではその影響を受けた中国の新感覚派作品の考察を行い、最後の章でそれらを比較文学的に検討するという、日本—中国—比較の三段階構成をとっている。本論文がこのような構成をとるのは、それらの作品が直接的な影響関係にあるということを根拠にしているが、それとともに、それらの作品を単独で取りあげた場合、その問題性があまりにも孤立的・断片的であるために、従来、それらの作品は文学史的には軽視されがちであったが、それを同時代の中国の小説と関連づけて考察することで新たな意味を見出そうとするためでもあった。その総合的考察によって、それらの作品は、日本という限られた文化環境を越えて、当時の東アジア地域において共通する文化的・社会的問題が捉えられることになった。その結果、これらの作品が、従来の文学史的評価では見出せなかった意義をもつものであることを発見している。そして、第10章「『眼に見えた風』—新しい都市生活者の造型—横光利一『眼に見えた風』論—」では、横光利一の『眼に見えた風』に関する作品論が展開されている。第11章「租界上海の都市風景線—穆時英の『もて遊ばれた男』を中心に—」は、穆時英の『もて遊ばれた男』の作品論となっている。比較文学的考察としては、両作品に共通する新感覚派的修辞技法の問題を都市表象と結びつけて論じている。

審査の結果の要旨

本論文はまず、現在めざましく開発されつつある文学・文化理論のきわめて新鮮な研究方法を駆使し、そうした諸理論の有効性を実証していることがまず注目される。とはいえ、作品分析の基盤は、国文学的方法による作品論的考察であって、本文解釈・人物造型の析出・テキストの構造分析といった基礎的方法が十分に踏まえられている。その結果、一定の水準に達している著者の日本語表現とあいまって、信頼に足る作品分析が行われており、新しい文学理論の有効性ととも、斬新で優れた論考となっていると評価される。

とりわけ、第1部の一連の『上海』論は、テキストと同時代史料との比較考察が骨子をなしていることから、方法的にいえば、コラージュ的であるという特色がみとめられる。「論文の要旨」ですでに言及したように、その考察は、一つの文学作品に対して、歴史・社会・文化・地理など多方面の同時代史料を博搜・駆使して比較研究を行い、非常に成功したものとなっている。日本近代文学研究としてみても、その考察は先行研究を凌駕する第一級の論文たりえている。第2部の一連の考察は、全体的にみても、作品論的考察としては学界の水準に達しているが、特に、中国の新感覚派小説の作品論と『眼に見えた風』論とは、きわめて秀逸である。さらに、中国の新感覚派小説の研究は、たんに作品論としてだけではなく、日本近代文学の側からみた場合、日本においてはまだそれほど紹介されていない、同時代の中国人作家についての情報・解釈・翻訳が豊富にみられるもので、比較文学のみならず、日本近代文学の学界にも、多大な貢献をなすものと評価される。

なお特記すべきこととして、付録論文「中国・日本の近代における『文学』という翻訳語の成立—清末上海滞在のイギリス宣教師エドキンスによる『希臘為西国文学之祖』の執筆をめぐって—」が、日本比較文学会の学会誌に採択された優れた論考であり、本論文の著者は、この方面の研究においても豊かな力量を示していることが立証されている。

ただし、本論文の欠点をあげるとすれば、第1に、本論文の結論として、日本における新感覚派文学運動のもつ歴史的意義の再検討がきちんと整理されていないこと（本論文の個々の論考からすれば、当然十分な再検討が果たされるはずだと思われる）。第2に、画家・新しい恋愛・狂気といったテーマが、1920年代の新感覚派文学運動と深く結びついていると主張する著者の基本的テーゼの妥当性が、今一つ説得力に欠けるといった点が指摘できる。このような若干の欠点が見えるにしても、本論文の優れた考察は欠点を凌いであまりあると判断される。

以上を総じていえば、本論文の成果は、新資料の発掘と分析、作品分析の信頼性、それに目的の達成度におい

て、日中比較文学研究に新生面を開き、独創的な研究として高く評価される。とりわけ、日本の近代文学を東アジア地域という広い視野から捉えようとする意欲は特記すべきで、学界に寄与するところはきわめて大きい。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。